「私の『戦後 70 年談話』 4」　　2025 年 12 月 09 日

元官房長官の野中広務氏は〈8 月 15 日に出すという安倍総理の談話もいろいろ言われていますけれども、事実は一つしかないんです。過去の事実は現実として受け止めて、過去に対して謙遜でなければ。現実に目をつぶって、近隣諸国や世界の信頼を得ようとしたって、それは無理ですよ〉**と、過去に目を止めよと書いている。戦争で大きな犠牲を受け、原爆も落とされた。後に続く人が真剣に行く末を考えてくれなかったら、この国はおかしくなると警告している。ヴァイツゼッカー元大統領の「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります」という言葉は真実である。**

元首相の村山富市氏は〈何と言っても日本はアジアの一員であり、アジアがあって日本があるし、日本があってアジアがあるわけです。そういう関係ですから、アジアの国々から信頼される存在にならないと、日本の将来はありません〉**と書いている。戦後の日本は米国一辺倒で来た。この異常な関係から、アジア諸国との信頼関係をいかに築いていくかが、重要である。米国への無批判な追従は、独立国家として、恥ずかしく、見苦しい。**

小説家の五木寛之氏は〈日本は明治に、神道と仏教を否定して、天皇教という新しい宗教を国が推進し、やってきました。そのためには命を捨ててもいいと徹底的に教育された世代です。宮城遥拝は、何も強制されていたわけではなく、畏くも天皇陛下がいらっしゃるということで、私たちは心からやっていたわけです。もしいま日本が戦後 70 年と違う道を選択したら、根本的な信仰として何を持ってくるのでしょうか。何もないんじゃないか、というのが私の実感です〉**と書いている。国家が宗教を利用して統治する時、その国は狂気に走るということを、しっかり認識しておかなければならない。偶像にひれ伏す時、人間は奴隷化する。天皇教は人間を奴隷にし、人間否定に暴走したのである。「信仰の自由」「政教分離」は、近代法の要である。**

作家の半藤一利氏は〈いま大事なことは「過去」というものはそれで終わったものではなく、その「過去」は実は私たちが向き合っている現在、そして明日の問題でもあるということなのである。なのに、何となく思考をあっさり停止し、単純で力強い答えにすがりつく。という風潮がいまの日本にある。そのうえに、平和が長く続いたため、事実として、日本人はさきの戦争をきちんと清算していないというイメージを諸外国にもたれているマイナスを忘れてしまっている〉**と書いている。ドイツの戦争責任の取り方と日本のそれは、全く違う。だから、近隣諸国では日本は信頼できないと、何かがあると「反日デモ」が、ぶり返される。石破前首相が戦没者追悼式で、「反省」と言った言葉が、やたらに注目されていたが、過去の事実を踏まえれば、「反省」は当然ではないか。**

作家の野坂昭如氏は〈原発は民間企業というものの、お上先導で進められ、安心、安全、クリーンで安価なエネルギーという触れこみで小さな島国は原発列島となっていった。原発がらみは、事故隠蔽はあたり前、いつしか体質となって積み重ねられてきたが、福島第一原発の事故はスケールが違った。国民は改めて原発の抱える空恐ろしさを知り、安心安全が幻だと判った。にもかかわらず、裏切られた、欺かれたと憤慨するのでもなく、原発について、その危険性と改めて向き合い、今後について立ち止って考えることをしない。あの敗戦の時と同じ。思考停止のまま、やり過ごそうとしている〉**と書いている。**

著名人の『70 年談話』を読み、 東京大学の鈴木宣弘教授が言った「今だけ、金だけ、自分だけ」という言葉を思い出した。過去、現在、未来を見据え、金儲けに走らず、後に続く人たちのことを覚えて行動することが大切だと示された。